

# 「海の道」

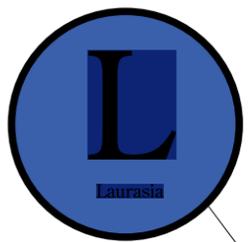
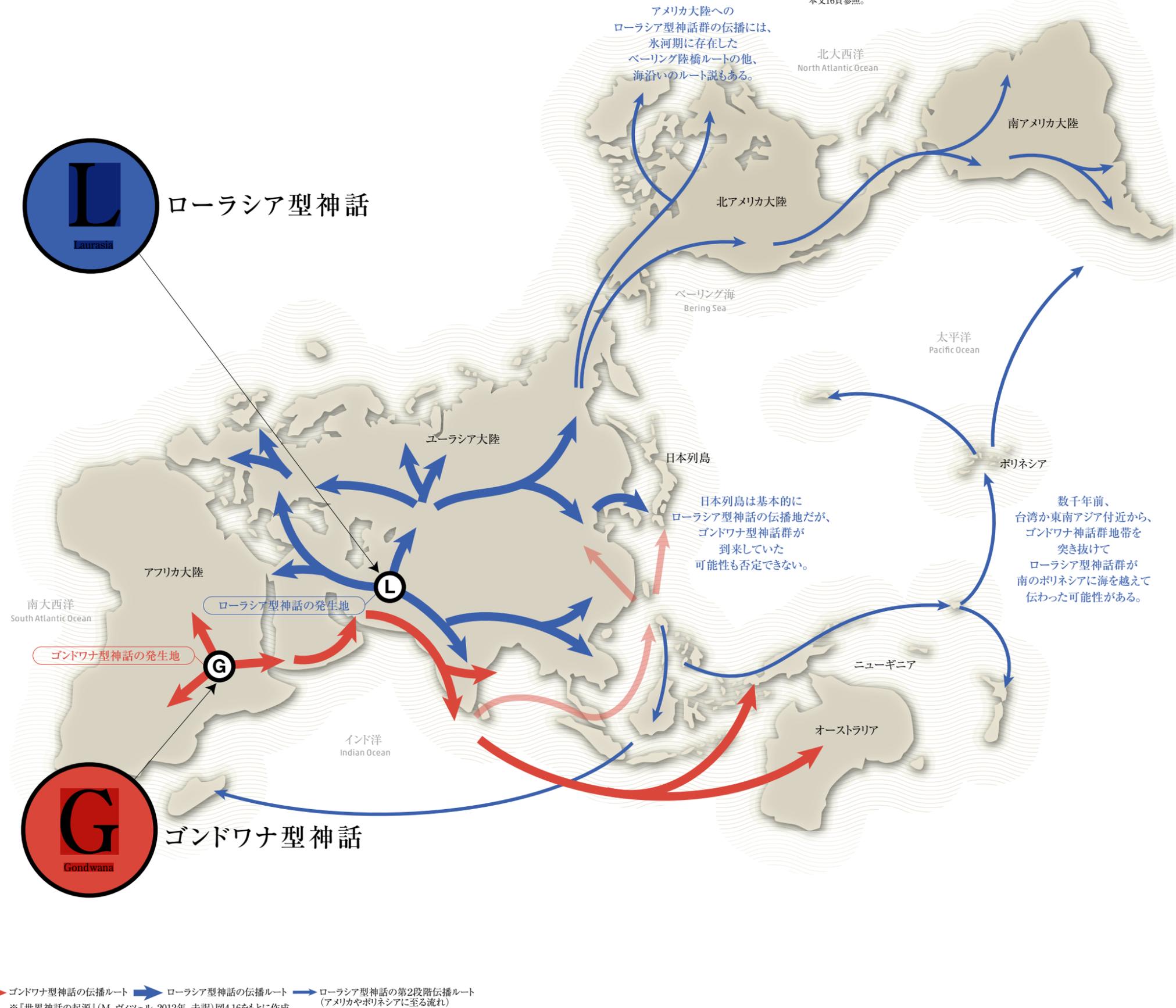
## 海洋民族としての日本人

周囲を海に囲まれた日本。はるか遠い昔、海を通じてこの島国にたどり着いた祖先たちと、世界の民族との間にはどのような関わりがあるのか。海を通して日本人のルーツを見つめ、海の民としての存在をいま一度考えてみたい。

文 後藤明

### 世界神話の分布・伝播想定図

ゴンドワナ型とローラシア型、二つの系統の神話が世界に伝わった想定ルートを示した。  
本文16頁参照。



### ローラシア型神話

本列島最西端の与那国島は、私にとって思い出深い島である。自分が海の人類学に進むきっかけを与えてくれた場所といっても過言でない。1974年、日本への返還2年目で、まだ車が右側を走っていた時代に、大学生の私は沖縄にここが、八重山列島の鳩間島で1ヶ月を過ごした。その旅の最後に、何かに惹かれるように与那国に来た。

2013年、その与那国を故あって

3回も訪れた。一度は町民の方に文化講演会を依頼されて、「与那国島と南太平洋」(琉球列島への最初の人類移動を考える)という話をさせてもらった。そのとき、学生時代に買った『与那国の歴史』(琉球新報社)という書籍を持っていった。その表紙の裏にある鉛筆書きのへたくそな字をお見せしたかったからだ。曰く「與那国島は日本の果てではない。ここから日本が始まるのだ!」と書かれていた。今思う



### ゴンドワナ型神話

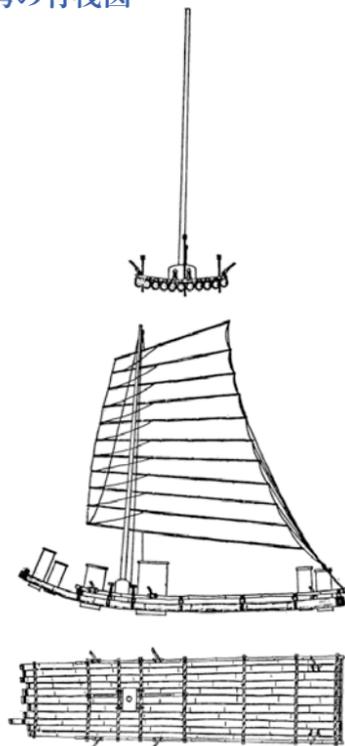
とずいぶん気分よかったものだと思う。しかし与那国から日本を考えると、情熱は間違っていないかと思う。自分をいま一度鼓舞するために、あえて島民の方々に見ていただいたのだ。

人類の移動

—アフリカからはるか太平洋までの道のり

実は、与那国をたびたび訪れたのに

は訳がある。最近琉球列島で3万年以上前の人骨や石器の発見が相次いでいる。その時代は後期旧石器時代に相当するが、その頃は地球上に氷河期が訪れていた。氷河期には海面が低下して北海道はサハリンと陸続きとなった。シベリアからマンモスを追ったハンタ1が北海道には歩いて渡ってきたであろう。一方、朝鮮半島と北部九州の連続性については、専門家の意見が割れているらしい。ただしはっきりしてい



台湾東海岸の筏の実測図。現地では「テッパイ」と呼ばれている。このように太い竹を用いるのは、17世紀初頭以降に、漢民族が台湾に移住しはじめた後と考えられる。台湾・中央研究院の報告書より。

るのは水河期の最盛期でも琉球列島は台湾や中国大陸とはつながらなかった。つまり琉球列島の旧石器人はかならず海を渡ってきたのである。

人類は700万年前にアフリカで誕生した。しかし今地球上で生きている人類はその直接の子孫ではなく、約20万年前にアフリカで再び進化した新人の子孫である。そしてこの新人こそ最

スが東南アジアとオーストラリア方面の動物相に大きなギャップを見いだしたウォレスラインがここを走っている。ここに散らばる小さな島々、マルク（旧称モルッカ）諸島、別名香料諸島がある。私にとって、調査地でもあり今年の夏も訪れる予定の懐かしい場所だ。

さて話を戻すと、近年オーストラリ

アに迫る古さをもつた渡海の証拠が、わが琉球列島から上がってきたのだ。日本の考古学のレベルをもってみれば、もっと古い証拠が出てきても私は驚かない。昨年、与那国に三度も行ったのは、この日本列島最古の海洋民の実証実験を行うためであった。

初に確実に海を越えた人類なのである。その証拠はオーストラリア大陸から上がっている。一説では6万年、確実なところでは4万年ほど前に、海面低下でできた東南アジアの巨大な大陸スندگانから、オーストラリアとニューギニア島が陸続きになった大きなサフル大陸へと渡っていったのだ。その間には深いマカッサル海峡・ロンボク海峡がある。博物学者ウォーレ

時代に入手できた植物材料で、旧石器時代と同じような石器を使って船を造って、実際に台湾あたりから渡ってみようという計画である。どのような船か？ 縄文時代なら丸木船が出土しているが、旧石器時代においては直接的な考古学的根拠はない。それで、海洋人類学を専門とする私の出番となった。私は旧石器時代に海を渡ったオーストラリア・アポリジニや、当時利用で

きたスندگانの植物民族学などを参考にすると、おそらく竹筏あたりではないかと考えている。フィリピン・ルソン島の漁民や台湾のアミ族が竹筏を使っているのを、現地調査で私は確かめている。しかし、現在アミ族が使っている太い竹は漢民族が導入したようなので、実際はもっと細い竹を組み合わせて作った可能性が高い。そうならば、タスマニア先住民などが作っていた葦船に近くなる。現在、アミ族の方々に協力を要請し、さらに南米チチカカ湖で葦船作りを習得してきた、カムナ葦船プロジェクト主管・石川仁氏などに協力を要請して、実験船を作る計画を進めている。

### 「世界神話学」と民族の移動

ところで、オーストラリアへの人類移住には人類史上もうひとつ特筆すべき事実がある。日本ではほとんど紹介がないが、近年欧米の研究者が進めている「世界神話学」との関係である。この動きは、近年進んできた遺伝子や言語学の成果と神話学の成果が、20万年前の現生人類の歴史の中で驚くべき一致を示していることがきっかけとなっている。

20万年前にアフリカを發した新人は、アラビアやインドの海岸部を伝ってスندگانに到達。そこからマカッサ

ル海峡・ロンボク海峡を渡ってサフル大陸に至った。その後アポリジニたちは外部からの影響をあまり受けずに狩猟採集の生活をしてきた。一方で、今から10万年ほど前にユーラシアの新人集団の中に新しい展開が始まり、それがヨーロッパ（いわゆるコーカソイド系）、東アジアさらにアメリカ大陸（いわゆるモンゴロイド系）へと移住・発展した。すなわち、現生人類には大きく分けて二つの集団がある。すなわちアフリカの集団やアポリジニなどの古い集団と、それ以外の集団である。これは遺伝子や言語学の成果と驚くほど一致する。

神話では、アポリジニおよびニューギニアなどの神話と、アフリカの古い集団すなわちサンやコイの人々のものに、共通要素が見つかるのである。これをゴンドワナ型神話と呼ぶ。一方、ユーラシア大陸からアメリカ大陸にかけては、新しい神話群であるローラシア神話群が広がる。日本神話は基本的にこれに属する。

ただし、興味深いのはポリネシア神話である。ポリネシア神話と日本神話の類縁性についてはたびたび指摘されている（拙著『南島の神話』中公文庫）。これはポリネシアの故郷が台湾か東南アジア付近にあつて、そこから数千年前に海を越えて南に移動したので、ゴンドワナ神話群地帯を突き抜けてポリネシアまで伝播したことで説明がつく。

今まで日本とポリネシアの神話の共通性について、「ポリネシア人は縄文人か？」といった、重箱の隅をつつくような議論が多かった。しかし実は日本とポリネシア神話の共通性は、前述のような人類史の大きな流れから説明すべき問題なのである。もし、より古い旧石器時代の遺跡が、琉球列島や日本列島で確認されたら、スندگانまで至ったゴンドワナ型神話群が日本列島にも及んでいた可能性が予測できる。

またアメリカ大陸への移住にも謎が多く、従来の「ベーリング陸橋説」以外にも、日本列島付近からアリュウシヤン、アラスカへ至る海沿いのルートの存在が、遺伝学や神話学からも指摘されている。

たとえば「海幸・山幸神話」の主要モチーフである「釣り鉤喪失譚」の環太平洋的分布は、アジアを發したモンゴロイドの移動経路に沿っていると筆者は考える。このように、琉球列島からスندگان

にかけては人類史のホットスポットなのである。

### 海を越える稲作の道

さて、『古事記』冒頭の記述では、泥のような状態の中から葦が生えてくるイメージで神々が立ち上がる。『日本書紀』冒頭では少し異なり「卵のよ



左／フィリピンのルソン島で竹筏を操る人。右／台湾東部に居住するアミ族による筏づくりの様子。

### アジア各地で使われる竹筏



うな状態」であったというのは、おそらく中国の思想の影響であろうが、日本の古代、現在の大阪湾から奈良盆地にかけて大きな湿地が広がっており、それが記紀神話の原風景なのである。たとえば万葉集の歌に、

大和には 群山あれど とりよるふ  
天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉島  
大和の国は(巻1)

と歌われているのは、詠み手が想像の中で海辺の風景を詠んだ可能性もあるが、かつて大阪湾は巨大な湿地だった可能性が大きいので、飛鳥と海は意外に近かったはずなのである。また京都と奈良の間には巨椋池という池があり、やはり湿地が広がっていたようである。

このような風景イメージは、稲作をもたらし現在の日本人の食文化や感性に大きな影響を与えた中国、それも黄河ではなく長江中下流域と共通の特徴をもつ。その地から稲作が日本列島に到来したのと同じ流れに沿って、「海幸・山幸」の物語、また「浦島物語」の原型が日本列島に持ち込まれたと思われる。

そして、長江以南の地域は、東南アジア・太平洋に展開するオーストロネシア(南島)語族の出発点であった可能性がある。オーストロネシア語集団

水底の 月の上より 漕ぐ舟の 棹  
にさはるは 桂なるらし

古代日本人は、月の影模様に桂の木の姿を思い浮かべたのである。日本の民間信仰では月の影はウサギが餅をついていると見るが、ハワイの神話では、月の模様は女神ヒナが樹皮布・タバを叩く姿を見いだした。

さて、古代日本人は、星座の中を動く月を船に見立てた。同じ思想はポリネシアのタヒチでも神話に見いだせる。「星の誕生」と題されたチャント(唱和)である。

天空神と地母神の間に生まれたのが、流れ星、月、太陽、さらに、彗星、ペルセウスと御者座、双子座である。これらはきれいに晴れた空にある、北の星座である。御者座はカペラを妻とし、産んだ子供が、偉大な祝祭・金星である。金星は夜に駆け、夜と昼、星と月、そして太陽を、航海士のコンパスのごとく支配する。

その後、金星はカヌー「常に変化する顔」号を準備し、西に航海して南の王の所へ行き、空の南側に位置するコンパスの星山羊座を妻として、生まれたのが色あせる赤・火星である。

(T・アンリ「古代タヒチ」収録。一部省略)

のもっとも北に位置するのは、アミ、タイヤル、パイワン、ブヌンなど台湾の先住民たちである。台湾は、冒頭で書いた与那国島から、天気がよいときには見えることで有名である。オーストロネシアの故郷と琉球列島の西端は指呼の距離であったのだ。

## 「星の航海術」を持つ人びと

琉球列島の民話を7万話以上集め、現在のNPO法人沖縄伝承話資料センター(宜野湾市)を設立した故・遠藤庄司・元沖縄国際大学名誉教授は、沖縄でも先島諸島、すなわち宮古・八重山列島に行くとき星伝承が多いことを指摘した。沖縄本島と宮古列島の間には、島影が見えない海域がある。そのため、おそらく南太平洋のような「星の航海術」が発達し、また星座を使う生活があったのではないかと、生前私に語った。これは遠藤教授が私に託した宿題である。

確かに八重山に行くとき、スバル星団が夕方東天に見える11月頃に麦や粟を播いた、という話を聞く。それを観察

上のチャントで「コンパス」というのは、ポリネシア人が羅針盤を持っていたという意味ではなく、むしろ水平線から昇る星々が方向を示す「スターコンパス」のことである(拙著『海を渡ったモンゴロイド』講談社)。そして移動はするが常に位置関係を保つ恒星を島々と見て、その中を行ったり来たりする金星や火星をカヌーと見ていたのだ。

## 海とともに生きる 民族の復興へ

限りのない大海原を進むことは、水平線と天が一つになる空間を進むことに等しい。多くの海洋民族の間で、海と天空の神話に連続性が見られるのはそのためである。このように、日本人の原体験には、海の民共通のイメージがあった。

翻って今の日本人を見ると、海から遠い民族になろうとしているのではないだろうか? 私の郷里の東北地方が大打撃を受けた東日本大震災も、その一因であろう。

しかし、日本人は海とともに生きていくしかないのである。領土問題などはむしろ逆手にとり、周辺諸国と積極的に海の文化交流や共同研究を進めるべきである。前述の日本最古の航海者実験航海プロジェクトも、台湾とくにアミ族の方々と共同で行う予定であ



八重山列島、小浜島の節定石。星の見える方角から農作業の時期を知るのに使われたという。

## 節定石

するための「星見石」や「節定石」が、石垣島、竹富島あるいは小浜島に残されている。ハワイや多くのポリネシアの島々でも同じように、スバル星団が夕方見え始めた時期を新年、「マカヒキ祭り」の始まりとし、豊穡の神口ノが雷鳴とともに再来すると信じられていた。ただし南半球のマオリ族などは、スバルが明け方東天に見える5月頃を新年としていた。

『万葉集』などの古典には、中国から来たのが明らかでない七夕の風習の他に、海と星を愛でた古代万葉人の感性が記されている。たとえば柿本人麻呂は、

天の海に 雲の波立ち 月の船 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ(巻7)

と、なんとも美しい歌を詠んでいる。また紀貫之も『土佐日記』において、それに劣らぬ秀歌を詠む。

る。復元船は日本人と台湾人が一緒に漕がなくてはいけない。もともと倭人の時代は、東シナ海などは文化交流のアーリーナだったのである(拙著『海から見た日本人』講談社)。

また、海の文化を復興するための指針となるのは、ハワイ・ポリネシア先住民が過去40年間進めてきた「カヌー・ルネサンス運動」である。近年は、彼らと同系統の台湾先住民の間などでも、その機運が盛んである。昨年私は、「沖縄美ら海水族館」で人気のある海洋博物館に、「海洋文化館」という海洋文化の世界的拠点を作る仕事を終えた。

そして今、この海の民の動きに連動するために、10人ほどの有志とともにNPO法人日本航海協会(Japan Voyaging Association)を「海幸・山幸神話」の国・宮崎県の日向海岸に設立すべく、動き出したところである。

ごとう・あきら / 1954年生まれ。海洋人類学者。ハワイ大学人類学部大学院博士課程修了。ハワイ大学、宮城学院女子大学助教授、教授、同志社女子大学教授などをへて、2007より南山大学人文学部人類文化学科教授。著書に『海を渡ったモンゴロイド』『海から見た日本人——海人で読む日本の歴史』(講談社選書メチエ)など。